

# 病児保育奮闘記

(16)

子どもサポート H&K  
大石 仁美

## 母子の関わりに学ぶ

### ある母子手帳に感動

多くのお母様方は、何かあった時にすぐ対応できるよう、母子手帳、保険証、診察券、お薬手帳等、小さなカバンの中にまとめて整理されている方が多いです。それ用のカバンも市販されていて、丁寧、親切、手厚い支援。なんでも揃う良い時代になったなあと思います。

初めて当施設を利用される時、出産は順調だったのか、子どもの発育曲線はどうか等、時々母子手帳を見せていただくことが有ります。

ある方の手帳を開いたとき、医師の記録のすぐ下にびっしり書き込まれた小さな字が目にとまりました。その時どきの、お母様の思いを克明に書いておられ、それは妊娠から出産、さらにその後の子どもの成長に伴って感じた母の思いを記した立派な記録でした。

初めての子どもの場合、なにもかもが新

鮮でめずらしさもあって、出産後の子どもの写真や動画を撮りまくっている人は多いです。それが第二子以降になると写真の枚数もガタッと減ってしまうということはよくあることです。この方にとって、二人目のお子さんの母子手帳であったので、それがさらに大きな感動を呼びました。

「今日は胎動がよくわかる。元気そうで嬉しいわと声を掛けてお腹をさすりました。」「もうすぐ出産日。はやく会いたい。どんなにしんどくてもお母さんは大丈夫！あなたに会えると思うと耐えられます。」こんな輝いている言葉が、続いています。

子育て経験があるとか、ないとか、そういうことではなく、どの子であっても母と子の関係は初めて紡いでいくもの。そのことを形で見せてもらえたのがとても嬉しい。

はるか昔、私も同じような気持ちを体験したなあ～と胸が熱くなってきました。でも、こんなふうに丁寧に記録してはいません。

母子手帳は、母子の健康管理だけでなく、将来子どもが結婚等で独立するときに、手渡してあげるべきものなのかもしれない。

自分がどんなふうにして生まれてきたのか、どんなふう大切に育てられたのか、

それを読み解くとき、とてつもなく大きな「幸せ」のプレゼントをもらったことに気付くに違いありません。

このように考えると、記録はとても重い意味をもってきます。

さらに母にとっても、成長の足跡だけでなく成長へのジャンプであることを思い起こしてくれたのでした。

## 母子関係で大切なこと

子どもと親の関係は、連れてこられた時とお迎えに来られた時の様子からおよそ伺い知ることが出来ますが、子どもは隠す知恵を持たないので、おしゃべりする中には親が言ってほしくないことも、けっこうあると思います。「ほーう」と面白そうに聞いていると、どんどんエスカレートしてきて「そんなことまで・・・」というような話に発展することもあります。それでも屈託ない表情でお家のことを話せる子どもは、健康な家庭の子だといえます。

ご両親の仕事や生活のあり様、人間関係や価値観等、様々な事柄が子どもに影響するわけですが、こんなふうにしたからこんなふうにしたというように単純なものではないところが面白いところです。

観察をしていると、幼い時ほど親の影響を強く受けているということは確かで、「子は親の合わせ鏡」とはよく言ったものです。

子を叱る前に、親が自分の心を鏡に映してみると、「なんだあ〜自分とそっくりじゃないか」と笑ってしまう場合もたくさんあると思います。腹が立った時にはワンクッションおくこと。そして親が自分自身を見つめ直すことに尽きます。

よく似ているのはDNA（遺伝子）の成せる業と言ってしまうえば簡単ですが、でも実際これはとてつもなく大きな比重を占めていることは実感するところです。

負けず嫌いやへそ曲がりも、恥ずかしがりやお茶目さんも、そうした性格的な所も多くはDNA。特に優秀な頭脳はDNAだと感じます。成長するにしたがって、環境の影響が大きく加わり、変わっていくでしょうが、そういうことを意識して、幼児期は、ああしなさい、こうしなさい、と言うよりも「私に似て、可愛い！愛しい子！」と思いを込めてみつめ、抱きしめる、それが一番のように思います。子どもは親の思ったようにはならない、親のようになるのですから。

当施設を利用されるお母様方の中には、素敵な方がたくさんいらっしゃいます。

専門職の難しいお仕事をされながら、四人の子を逞しく育てていらっしゃるお母様。小学校の保護者会役員としてもご活躍のようで、まさにスーパーウーマン！驚愕のかぎりです。

この方の真似は出来なくても、時間の使い方や、子どもとの距離のとりかた、間の使い方等、学ぶことはいっぱい。

子どもべったりではないけれど、大切なことは見逃さない。これが最も大切で、日ごろの母子の触れ合いの中で、築かれていく関係性なのではないか、そう思われます。

子どもに「今日も楽しく遊んでね！ハイ、タッチ！」「タッチ！バイバイ」とタッチして笑顔で別れる親子、いいですねえ。

「ママはお仕事頑張ってくるからね。ギュー！」と抱きしめてお別れをするお母さんもいらっしやいます。子どもはそれなりに理解するようで、いじらしいです。

たまにしつけの厳しい方もおられて「ちゃんとおあいさつして！」「そんなことしないで！」と子どもを叱る方もおられますが、子どもが親の目線を気にしている様子がなければ、親の教育方針を尊重するようにしています。挨拶がきちんと出来るというのはとても気持ちのいいものです。

でも子どもがおどおどしていたら、「お母さん、ごめんね。ここでは甘やかすのが方針なの」と助け船を出すこともあります。「はい。そうしてください。病気だものね。」きっとシャイな方なのでしょう。自分ではなく子どもに目線が移るよう、無意識が働いているのかもしれない。

子育てに、成功、失敗などという単純な評価はあてはまらないので、親は自分を信じて、自分が良いと思う教育方針をたて、大きくぶれずに、学習しながら、育てていけばいいのではと思います。

大きな問題に直面したとき、あれ？と気づく感性さえあれば、その時にきちんと向き合える力さえあれば、子育ては絶対大丈夫！カリカリしないおらかな子育ては、周囲の人々を幸せにしてくれます。

私も幸せをいっぱいもらっています。

最後に絶対してはいけないことを一つだけ。「子捨て」です。私とパートナーの教員

生活の中で、いくつかの子捨てのケースを見てきました。思春期になって、親の思うとおりにならず、大きく曲がってしまった子を、世間体を気にするあまり、遠方の全寮制の中高へ転学させてしまったり、体のいい留学という形をとったりして世間の目から遠ざけてしまう。また、家出した子をそのまま放置したケースもありました。自分を理解して欲しい、愛して欲しいともがいてる子を切り捨てるのですから、なんとも哀れです。そのほとんどが、世間体をはばかり父親主導でした。

母親はこういう時、断じてこれに抗い、子どもを守らなくてはなりません。どんなに辛くても母親にはそれが出来る。

新しい命を授かった時の新鮮な喜び、出産の苦しみに耐えたあとの感動の対面を思い起こせばいいのです。その後の成長の過程の中で、どれほど慰められ、助けられたかを思い起こせばいいのです。

「どんな子どもでも自分の子ども」その覚悟が子どもを救います。